

✓ 緩和ケアチーム・緩和ケアセンター 開設記念講演会

●一般講演

『緩和ケアチーム・緩和ケアセンターのご紹介』

緩和ケア病棟所長 谷 一彦

●特別講演

『これからのがん診療』

～治療医と緩和ケアのチームで支える医療を実践するには～

日本医科大学武蔵小杉病院

腫瘍内科 勝俣範之教授



緩和ケア病棟所長

谷 一彦

(たに かずひこ)

H27年10月16日に当院にて第2回地域連携カンファレンス『緩和ケアチーム・緩和ケアセンター開設記念講演会』を開催しました。院内外より約170名のご参加を頂きました。

まずは、私より緩和ケアセンター開設の経緯と目的をご紹介しました。当院は福井県では先駆けて、積極的に緩和ケアに取り組み、緩和ケア病棟を開設し、多職種ของทีม医療を提供し、緩和ケア認定看護師、がん性疼痛看護認定看護師、緩和薬物療法認定薬剤師などの専門スタッフも多数教育しました。今年の10月から医師も3人体制と、県内では抜きでたスタッフとなり、これを機会に、院内機能の強化と、地域緩和ケア連携拠点機能の強化のために緩和ケアセンターを開設いたしました。特にこれから需要の増大する在宅ケアのために、患者さんが安心して自宅で過ごすことができるように、地域の医療関係の皆様を支援できるセンターを目指します。具体的には、在宅移行支援、退院後の相談連絡窓口機能、バックアップベッド、地域医療スタッフの教育・研修、地域へのチーム派遣などを行います。



特別講演は、日本医科大学武蔵小杉病院腫瘍内科の勝俣範之教授にご講演いただきました。腫瘍内科医の立場から早期からの緩和ケアの重要性をお話いただきました。特に強調されたのは、いたづらに最後まで化学療法を行うことは、患者さんのQOLを損ね、家に帰る機会を逸し、生命予後まで短縮させてしまうことです。そのような不幸を避けるためには、早期から治療の目的を話し合い、患者の希望・価値観を大事にする、意思決定の共有(Shared Decision Making)に基づくインフォームド・コンセントが必要であること。再発、転移した時点では、がんを治すことは困難だが、生活の質を大切にして、がんより良い共存を目指すことができること、緩和ケアは手術・放射線・化学療法と並ぶ「第4の治療」であることを説明することなどを、豊富なエビデンスを混せてお話しされました。患者さんを支えるためのチームには、プライマリケア医の役割が重要であることもお話しされました。

講演会終了後は、コーヒーを飲みながら、勝俣教授、と参加者が自由に歓談できる情報交換会を設け、大変盛り上がりました。

地域連携カンファレンス

開催日時：年4回開催

最新の話題や症例などを様々なテーマで行っています。

奮ってご参加ください。